新中国の漢字の筆順

――「常用漢字的筆画筆順」考――

久米　公

一、はじめに

一九七九年七月、上海教育出版社から「常用漢字的筆画筆順」が刊行された。私の知る限りでは、中国で漢字の筆順がこうしたまとまりの形で刊行されたのは本書が初めてかと思われる。

新中国では、一九五六年に「漢字簡化方案」が公布され、それを受けて、一九六四年に中国文化部・文字改革委員会から「簡化字総表」と「印刷通用漢字字形表」が出された。これらをもとにして、八〇パーセントを越すと言われた文盲の追放のために、新漢字体系による識字教育が強力に推進されてきた。

本書の登場は、そうした新中国における文字改革及び識字教育施策の中で、いわば必然の課題として予測と期待が持たれていたものである。それは、あたかもわが国における戦後一連の国語国字施策推進の中で「筆順指導の手びき」（昭和33年3月博文堂出版刊）が刊行されたのと軌を一にすると把えられるからである。「筆順指導の手びき」の場合と同様に、本書は、今後の中国における識字教育の上に大きな役割りを果たしていくことであろう。

こうした本書の意義と役割りを思うにつけ、わが国の漢字及び漢字教育・書写教育の研究と実践にも無縁でないと痛感する。本書に常用漢字として示された漢字の字種・字体・字形・点画・筆順と、それらによる今後の教育及び普及のあり方に、同じ漢字文化圏に生きるものとして関心を寄せていかねばなるまい。

私は、さきに恩師野地潤家先生と藤原宏先生に御監修いただいて「筆順指導総覧」（昭和52年9月みつる教育図書出版刊）「筆順学習のすべて」（昭和53年3月同上）を世に問い、筆順とその指導への関心を深めてきた。学恩の大きさを思いつつ、その眼でこの「常用漢字的筆画筆順」を通覧し、とりあえず第一段階の考察を試みてみたい。

本書には、かつての漢字簡化の場合に見られたと同様に、われわれの意表をつく筆順がいくつか示されている。「筆順指導の手びき」と思い合わせながら、それら彼我の主な相違点を明かにし、比較識字教育研究・比較書写書法教育研究へのささやかな手がかりとして提示しておきたいと思う。

二、「常用漢字的筆画筆順」の概要

〔1〕本書の構成

1、本書は、B6版一一〇ページの簡素な小冊子である。「筆順指導の手びき」のB5版一一四ページとほぼ同規格である。

内容は次の四項から成っている。

一、筆　画……1～2（2ページ）
二、筆　順……3（1ページ）
三、常用漢字筆画筆順……5～93（88ページ）
四、漢語拼音検字表……94～109（16ページ）
編写説明……110（1ページ）

収録常用漢字数は、巻末の編写説明によると「全書共収常用漢字近千五百個」となっている。実際に筆順の示されている漢字は一四九二字。「漢語拼音検字表」も同字数である。

この本書の構成は、「筆順指導の手びき」と基本的には変わらない。ただ、「筆順指導の手びき」が、簡略ではあるが「二、筆順指導の心がまえ」「筆順指導の計画について」を置いて書名の趣意を生かしている点に相違が認められる。

2、本書の中心部は、言うまでもなく「三、常用漢字筆画筆順」である。図版に掲げた冒頭部分に見るように、常用漢字一四九二字を画数別・第一画の形状別に配列し、各字ごとに「注書」「筆順」「弁正」の欄を仕組んでいる。

筆順の示し方は、「筆順指導の手びき」同様に、一画ずつの累加方式をとり、部首部分が重複するものは、煩雑をさけて適宜省略を加えている。八コマ法をとっているので、六コマ法の「筆順指導の手びき」よりは細部の省略が少なく、わかりやすい。これらについては、次項に掲げた「編写説明」に詳述されている。

〔2〕本書刊行の趣意

本書刊行のねらいは「編写説明」にくわしい。全訳を掲げよう。

編集についての説明

一、本書は、工農兵大衆が正確な漢字を書くことを学ぶための手びきとして用いるもので、小学校の国語教師が識字教育の参考として使用してもよい。本書全体に収めた常用漢字は千五百字近くある。字体は《印刷通用漢字字形表》、《簡化字総表》、及び《第一批異体字整理表》を基準とした。

二、いくつかの漢字は、人それぞれの書写の習慣がまちまちで、例えば〃火〃という字は、ある人は先に〃丿〃を書いて後から〃く〃を書くし、ある人は先に〃丿〃を書いて後から〃人〃を書く。本書では、多くの人が習慣としている書き方一つだけを選んだ。

三、本書では、漢字の書き方と字形の規範に重きを置き、筆画筆順をあやまりやすい漢字に対しては、筆順の説明のほかに、さらに〃辨正〃の欄で注釈を加えた。また、それぞれの漢字には漢語の拼音をつけた。多くの音をもつ字には、常用の読音一種類だけをつけてその他は省略し、字義は注釈しなかった。

四、本書では、筆画の多少によって、少ないものから順次排列した。同じ画数の字は、第一画の形によって〔丶〕〔一〕〔丨〕〔丿〕〔亠〕の五種類に分けて順次排列した。例えば〃衣〃と〃扫(掃)〃とは共に六画であるが〃衣〃の第一画は

〃、〃なので前に排列し、〃扫〃の第一画は〃一〃なのでその後に排列した。〃、一一ノ冂〃以外の点画の形は、以下のように処理した。〃冂〃は〔一〕の類に繰り入れ、〃亅〃は〔一〕に、〃フ乙ム〃などは〔冂〕の類に繰り入れた。

五、筆順の欄の中で、部分の形が同じ字については、前に出るものにくわしい示し方をし、後に出るものには適宜省略を加えた。読者は前に出たものを参照して類推していただきたい。

六、本書の最後に〃漢語拼音検字表〃を付しておいた。漢語の拼音にくわしい読者のための検索用として供する次第である。

〈本書の規範性〉

右「編写説明」の冒頭に「工農兵大衆が、正確な漢字を書くことを学ぶための手びきとして」「小学校国語教師が、識字教育の参考として」と掲げている。決して強い語調ではない。しかし、漢字を簡化し、識字教育を国家の重要施策として推進している新中国において、漢字の筆画筆順の規範として提示されたことを思うと「手びきとして」「参考として」は軽々しく受け止められないものであろう。それは、わが国の「筆順指導の手びき」におけるその後の基準性に徴してみれば明らかである。

〈筆順に対する考え方〉

中国では民衆の知恵を尊重する。漢字の簡化に関してもそうであったが、この筆順の採択に関しても、「編写説明」に「多くの人々が習慣としている書き方一つだけを選んだ」とし、民衆への浸透性を重視している。そのことから、「二」に例示されている〃火〃の筆順のように、われわれには奇異と思われるような、先人の知恵（伝統）に全くつながらない筆順が採択されるということも起きている。簡体字という新たな形を書くための筆順が求められる中で、新発想による知恵も取り込んでいったのであろう。

〈筆画に対する考え方〉

「編写説明」の「三」に述べてあるように〃弁正〃の欄を置いていることは注目しておきたい。「筆順指導の手びき」では「本書は字体の手びきではない。したがって本書においては字体の問題を解決しようとは思わない」（事実はそうでない面があったが）としていたのに対して、本書では「漢字の書き方と字形の軌範に重きを置き」「誤まりやすい漢字に対して〃弁正〃の欄で注釈を加えた」とし、字体上の問題を正面から扱う姿勢を明示している。次項に掲げた「筆画」への考え方を土台にして、各文字の部分や点画の性格を「はね・払い」に至るまで細部にわたって注釈し規範を示している。簡化によって生じた新しい字体や部首部分の性格を明示して、手書きによる文字認識の鮮明化をめざしたのであろう。

三、筆画・筆順に関する基礎基本

本書の「一、筆画」「二、筆順」には、筆画・筆順に関する用語規定と、漢字を正確に認識し書写するために基礎基本として把持されるべき事項が示されている。

漢字の構成単位である筆画（点画）の重要性に触れ、その形、性

先横后竖	十	一十
	干	二干
先撇后捺	人	丿人
	木	才木
从上到下	三	一二三
	合	人亼合
从左到右	川	丿川川
	洲	氵氵氵洲洲
从外到里	月	月月
	向	向向
先外后里再封口	日	日日日
	田	田田田
先中间后两边	小	丨小小
	水	丨水水

此外，还须注意下列比较特殊的书写规则。

(一) 关于写点的笔顺，应注意：

点在左上先写，如：斗　为　头

点在右上后写，如：戈　发　我

点在里边后写，如：瓦　丹　又

(二) 竖在上面（在横的左面），在上包下或全包围结构里，一般先写。如：

战　冈　围

(三) 用"辶""廴"作偏旁的字，和一些下包上的半包围结构，一般先内后外。

如：过　延　画

三　常用汉字笔画笔顺

一画——二画

字	注音	笔顺	辨正
一画			
乙	yǐ	乙	横折弯钩一笔写成
二画			
【一】			
二	èr	一二	
十	shí	一十	
丁	dīng	一丁	
厂	chǎng	一厂	
七	qī	一七	第二画是竖弯钩
【丨】			
卜	bǔ	丨卜	第二画是点

一　笔　画

汉字是由不同笔画交错构成的。写字的时候，由落笔到提笔，叫做"一笔"或"一画"。构成字形的各种形状的点和线就是笔画。汉字的基本笔画是"点""横""竖""撇""捺""提"六种：

笔画	丶	一	丨	丿	乀	亠
名称	点	横	竖	撇	捺	提
例字	主	十	十	人	人	地

两种或两种以上的基本笔画连起来使用，就形成了有折笔的复杂笔画。这类复杂笔画有二十一种：

笔画	乁	乁	乁	乚	乚	亅	乛
名称	横撇	横折	横钩	横折折	横折提	横折钩	横撇弯钩
例字	又	回	军	朵	讲	月	队
笔画	乙	乃	乃	乚	凵	亅	与
名称	横折弯钩	横折折撇	横折折钩	竖提	竖折	竖钩	竖折撇
例字	九	建	仍	农	山	于	专
笔画	乚	乜	乀	乀	丿	乀	乚
名称	竖弯钩	竖折折钩	撇点	撇折	弯钩	斜钩	卧钩
例字	儿	马	女	么	家	民	心

一个字有几画，要细心分辨。错字大多数是由于增减笔画造成的。所以无论写哪个字，都要辨清它的笔画，照它的原样正确地写出来。

二　笔　顺

一个字先写哪一笔，后写哪一笔，叫做笔顺。汉字的笔顺有一定的规律，一般是：

格、種類と名称等について、要点を簡潔に記述し図解している。その中で、漢字の基本筆画を六種、複雑筆画を二一種に整理限定していることは、わが国の漢字教育・書写教育のためにも注目すべき点であろう。それあればこそ「どの字を書く場合でも、その筆画をはっきりさせ、基本の形に従って正確に書き上げなければならない」と明言できるのである。

筆順の原則等その他細部の考察は後日にゆずることとし、以下に本項の全文と訳文を掲げておく。

一、筆　画

漢字は、異なった筆画の交錯によって構成される。字を書くときに、筆を下ろしてから上げるまでを〝一筆〟あるいは〝一画〟と言い、字形を構成する各種の形状の点や線が筆画である。漢字の基本点画は〝点〟〝横〟〝竪〟(たて)〝撇(左払い)〟〝捺(右払い)〟〝提(右はね上げ)〟の六種類である。

―図版(前ページ)参照―

二種類あるいは二種類以上の基本点画をつなぎ合わせて使用すると、折筆のある複雑な筆画を形成する。この種の複雑な筆画に二十一種がある。

―図版(前ページ)参照―

一つの文字が何画かということは、注意して弁別しなければならない。まちがった文字の大多数は筆画の増減によって作り出されるものだからである。だから、どの文字を書く場合でもその筆画をはっきりさせ、基本の形に従って正確に書き上げなければならない。

二、筆　順

一つの文字で、どの一筆を先に書きどの一筆を後から書くかということを筆順と言う。漢字の筆順には一定のきまりがあり一般的には次のようである。

- 横が先で縦が後　(例＝十、干)
- 左払いが先で右払いが後　(例＝人、木)
- 上から下へ　(例＝三、合)
- 左から右へ　(例＝川、洲)
- 外から中へ　(例＝月、向)
- 外が先で中が後、それから口を封じる　(例＝日、田)
- 中央部が先で、両側が後　(例＝小、水)

このほかに、また、次の比較的特殊な書写のきまりに注意しなければならない。

㈠点の筆順について注意すべきこと

- 左上にある点は先に書く　(例＝斗、為、头)
- 右上にある点は後から書く　(例＝戈、発、我)
- 中にある点は後から書く　(例＝瓦、丹、叉)

㈡上部にある縦(横画の左部にある縦画)、上が下を包むかあるいは全体を囲む結構の場合の縦は一般的に先に書く。

(例＝战、冈、圈)

㈢〝辶〟〝廴〟を用いて偏旁とする字、及び、下が上を包むような半包囲の結構は、一般的に内側を先にして外側を後で書く。

(例＝過、延、画)

四、「常用漢字筆画筆順」にみる彼我の筆順の相違点

前掲の図版に示された要領で、以降93ページまでに、一四九二字の筆画と筆順が配列されている。「三」に示された筆順の原則をふまえて、ほぼ、同一構成部分は同一筆順で書くという態度で貫かれている。しかし、中に問題がないでもない。「筆順指導の手びき」のそれと個々に比較すると、大部分は共通するが、意表をつく場合もある。以下、それらを具体的に示し考察を添えてみたい。

なお、活字上の制約と、比較という立場から、彼我共通の文字のみを対象とし、簡体字は除外することとする。

(1)「王・玉・主・美・青・生」の場合

王 A…日本　B…中国

玉 A…日本　B…中国

主 A…日本　B…中国

美 A…日本　B…中国

青 A…日本　B…中国

生 A…日本　B…中国

漢字でも仮名でも、構成の主要骨格は縦画と横画である。その縦と横が交差する際の順序性は「横→縦」が基本である（欧米の文字は横に並列して書く中で発達してきたので逆の関係が強い）。これは、本書でも先の筆順の原則の第一にあげてある。

問題は、画数が複数化するときにどう運用されるのかということである。「十・土・干」の形のときは問題ないが、右にあげた形のときに、今回、明らかに彼我の筆順の基準に差異を生じることになった。この構成の筆順を日本でAタイプとするのに対して、本書ではすべてBタイプである。日本とは逆に最終横画を単独化し、底画として独立させている。思い切った発想の転換である。これは次の(2)(3)にも通じていき、全字の一割近くの漢字に影響する。

Aの筆順は、古来、中国でも日本でも普通にとってきていた。行書・草書にも共通し、伝統の中でBは例外的であった。

伝統（先人の知恵）や速書した場合の行書草書という遺産との共通をさけて、あえてBを基準化した根拠は何なのだろうか。先述のように「多くの人が書き慣れている一種類の書き方だけを選んだ」とすれば、文盲追放のための識字教育の普及の中でこのBタイプが広く大衆の中に浸透しているということなのであろうか。それとも、右で推測したように「最終横画を底画として独立させる、という思い切った発想の転換」によるのだろうか。

ところで、次にあげた構成もこれと同じ系列に属すると考えられる。が、※を付した「五・伍」の形に限っては、どうしたわけか伝統の筆順によっており、一連の中で例外的と思える。

案 A…日本　B…中国

※五 A…日本・中国　B…

(2)「里・坐・墨・重・勤・淮（ふるとり）」の場合

里 A…日本　B…中国

坐 A…日本　B…中国

墨 A＝…日本
B＝…中国

勤 A＝…日本
B＝…中国

重 A＝…日本
B＝…中国

准 A＝…日本
B＝…中国

一連の形には、すべて(1)に通じる構成部分がある。(1)と同様に、日本がAの筆順をとるのに対して、中国はBをとっている。伝統的にはAであり、行書・草書にも通じる。だがこれも、今回、はっきりとAB両系列に分かれてしまった。

(3) **「田・由・典」の場合**

田 A＝……日本
B＝……中国

由 A＝……日本
B＝……中国

典 B＝…日本
A＝…中国

※再 A＝…日本・中国
B＝

この形は、構成単位をどうとらえるかによって、筆順の考え方に違いが生まれる。「筆順指導の手びき」では中央部を「十」の形ととらえて、「この場合に限って横画を後に書く」という例外的原則を立ててAの筆順を基準とした。それに対して、私は前記(1)(2)と同原理と見据えて(1)(2)と同じ原則で考えるのが妥当（拙著「筆順指導総覧」34ページ）としてきたが、中国では一律にBタイプとした。原則の運用上、(1)(2)ともくい違いを生じない点ですっきりしていて系統的である。しかし、伝統とくい違うことになった。

ところで、※印を付して示しておいたように、「再」だけは日本同様にA型の筆順をとっている。「由・典」に通じる構成なのに、伝統的なAの筆順に従っていて、どうしたわけか例外的である。日本では、同じ構成をもつ「溝・構・講・購」などもすべてAをとる。中国ではこれらはすべて簡化されて別体になってしまったので、「再」にみる構成は本書には他に字例がない。

(4) **「火・灯（ひへん）」の場合**

火 A＝……日本
B＝……中国

灯 A＝…日本
B＝…中国

われわれ日本人にとって最も意外に感じられるのは「火」の筆順を「B」としたことであろう。その事情は先の「編写説明」で明らかである。この風変わりな筆順が新中国の書写習慣の中にそんなにも普及していたのかと驚かざるを得ない。「筆順の原則」としてあげている「左から右へ」によったのかとも考えられる。

むろん、伝統的にはBの筆順はない。行書・草書にも通じない。この筆順で速書きした場合、別字と見誤られそうな形になりかねない。なお、この字を部分とする漢字は二〇字に及び、すべてBにしている。

(5) **「右・布・有・皮・成」の場合**

右 A＝……日本
B＝……中国

布 A＝……日本
B＝……中国

有 A＝……日本
B＝……中国

成 A＝……日本
B＝……中国

皮 A＝…日本
B＝…中国

一連の字の一・二画の構成順序に対して、日本はすべてA。伝統に即し、行書・草書に通じるからである。しかし、現実にはBタイプの「左・友・存・在」等と混用されることが多い。識別に対する考え方（前記拙著43ページ）が一般化していないこともあって、煩雑感醸成のもとになっている。

中国では、今回、これら及びこれらを含む文字全部をBの筆順とし、例外を作っていない。その点では明快である。しかしながら、字形（点画の長短や接筆のあり方）には、伝統的筆順によるそれを残している。

(6) **「母・丹・舟・卵」の場合**

母 A＝ 一 丨 丁 、 、 一 …日本
B＝ 一 丨 丁 一 、 、 …中国

舟※ A＝ ・ 丿 、 ・ 一 …日本
B＝ ・ 丿 、 一 ・ …中国
C＝ ・ 丿 一 、 ・

丹 A＝ 丹 ・ 一 ……日本
B＝ 丹 一 、 ……中国

卵※ A＝ 卩 、 丿 ㇇ 、 丨 …日本
B＝ 卩 、 丿 ㇇ 丨 、 …中国
C＝ 卩 丿 ・ ㇇ 丨 、

右のうち、「筆順指導の手びき」には「母・船」の形しか扱われていない。が、日本ではこれら一連の筆順はすべてAを普通とし、義務教育の中で「毎・海・悔・梅・侮・敏・繁・毒・貫・慣・航・艦」等の同類漢字をすべてAで扱っている。

それに対して、本書はすべてBである。

しかも、中国の場合、同じBの中にも不統一が見られる。「舟」は、「母」との関係からすれば、当然、Cとなるべきである。「丹」ともくい違わない。同様に、「卵」もCとするのが他との関係からいって自然ではあるまいか。Cとしないのは、あるいは、後掲の「印」の左部との相通を考えたためであろうか。

前掲のように、「一、筆順」に「点の筆順について注意すべきこと」として「中にある点は後から書く」と示し、例に「瓦・丹」をあげている。「舟」はともかく、「卵」の左部はこの原則からはみ出すことになる。

ところで、「母」と類似の形をもつ「貫」の場合の筆順も、次掲のように日・中とでは対照的である。

貫 A＝ 一 ㇇ 一 ㇇ 一 ㇇ 貫 …日本
B＝ 一 ㇇ 一 ㇇ 貫 …中国

上部の形は、「母・毎」と似ているが、一・二画は右下で交差する形をとらない。「田」の類である。この形から、第一画を「竪折」、第二画を「横折」と把えられるかどうかに疑問が残る。これは字体上の問題で、画数だけでなく筆順もかかわっていく。このことは、日本と共通する問題でもある。

それはそれとして、この形は「母」と違って中の点の部分が縦画の姿をとる。それをBの筆順で書くのは、先の(1)(3)などに照らして、どうなのであろう。

(7) **「万・方・放」の場合**

万 A＝ 一 ㇇ ノ ……日本
B＝ 一 ノ ㇇ ……中国

方 A＝ 亠 ㇇ ノ ……日本
B＝ 亠 ノ ㇇ ……中国

これまた日・中で対照的である。日本で「力・刀」に通じるAをとるのに対して、中国ではB。もちろんAが伝統的である。ただ、この構成の場合、「力・刀」などと違って「左払い」が先行的位置

にくることから、日本でも、何の指導も加えないで書かせると、Bの筆順をとる者の方が多い。もしかしたら、中国にも一般にそうした実態があってBを採用したのかもしれない、名蹟にも例がないわけではない。

一方、似た形を持つ「矛」に限っては、Aの筆順を残している。

(8) **「乃・及・九」の場合**

乃 A＝ノ乃 ……日本
B＝乃ノ ……中国

及※ A＝ノ乃丶 ……日本・中国
B＝乃ノ丶

九※ A＝ノ乙 ……日本・中国
B＝乙ノ

この三つの形も、日本は伝統的筆順に即したAをとる。それに対して、中国の基準は、「乃」に限ってはBで「第一画是横折折鈎」としている。(7)とは逆に、これは「刀・力」の同類とみている。

それでいて「及」をAタイプに残したのはどうしてだろうか。その辺に不統一の感が残る。混乱を生まなければいいのだが——。

(9) **「収・壮・北」の場合**

収 A＝丨ㄏ又 ……日本
B＝ㄑ丨又 ……中国

壮 A＝丨丶丶土 …日本
B＝丶丿丨土 …中国

北※ A＝一丨丨匕 ……日本
B＝丨一一匕 ……中国

このグループにも不統一と思われるものがある。

日本では「収・壮」の扁の形はすべて縦を基準画として見据え、Aの筆順をとる。その意味で統一的である。「北」の扁部は、明朝体活字では「壮」と似た形であるが、教科書体や手書きでは、下部の横画を「土」的に書く。だからAの筆順でよい。ただし、「収・壮（扁の形は小学校では「状」で学習する）は、指導を加えないで書かせると、Bタイプが圧倒的に多い。

中国で両者をBとしたのは、民衆の実態に同様の傾向性があったからであろうか。とはいえ、「北」に限っては疑問が残る。「北」の字の扁部を「壮」と同様の形にしているのに、その筆順は「壮」と全く逆にしている。筆写の習慣を尊重し、草書の筆順を採用したのかと想像されるものの、同一構成の筆順を文字によって使い分けるとなると、煩雑感を増幅することになろう。

(10) **「巨」の場合**

巨 A＝丨冂一 …日本
B＝一冂丨 …中国

套※ A＝一丶一 ……日本
B＝一丶二 ……中国

「巨」の字の筆順をAとしている日本であるが、日常書写の中ではA以外のさまざまな筆順が見られる。同類に「臣」があり、伝統的には両者共にAが基準である。

これに対して、中国でBとしたのは、形の相通から、「匠・医・匡・区・匹」等と同列にみなしたためか、あるいは、簡体字の「馬・鳥」などにもつながるとみてそうしたのであろうか。

ただし、Bの筆順で書くと画数は四画となり、Aで書くと五画となる。日本の漢和字典でも、四画（匚部二画）にしたものと五画（工部二画）にしたものと両様ある。中国の康熙字典は後者にしている。

なお、類字的構成をもつものに「長」の上部がある。中国では

「長」の字は簡化されて形を変えている。この上部の形は「肆・套」の中にしか見られないが、その筆順はBである。これもまた対照的である。

(11) 「耳・取」の場合

耳 A＝一 ノ ⺀ 丨……日本
B＝一 ⺊ ⺀ 一……中国

取 A＝一 ノ ⺀ 丨 又 …日本
B＝一 ⺊ ⺀ 又 ……中国

この字は、伝統的には、楷書でも行書でも「耳」を単独に書くときはA、扁として書くときはBをとってきていた。それを日本では一律にAとしたのに対して、中国ではBに統一したことになる。横書きすることや、扁として用いる字が多いことを考えると、Bの方が機能的かもしれない。

(12) 「出」の場合

出 A＝丨 ㄴ ㄴ 凵 ……日本
B＝ㄴ 丨 凵 ……中国

伝統的見地から言えば、Aは楷書の筆順であり、Bは草書の筆順である。新中国は草書の筆順の方を基準化したことになる。

(13) 「必」の場合

必 A＝丶 ノ 乙 ノ 、 、…日本
B＝ノ 乙 丶 ノ 、 …中国

C＝ノ 乙 丶 丶 、
D＝心 ノ

伝統的には、楷・行・草とも、AまたはCで行われてきた。日本はその中からAを採用し、中国では、Bという特殊な筆順を採用した。「左から右へ」の原則からであろうか。Bは日本の児童生徒にも例のない筆順ではないが、「心」の方が先に学習されることもあってか、日本では、特に指導がなければDの筆順をとるのが普通である。中国では、その辺の実情はどうなのだろう。

(14) 「所・戸」の場合

所 A＝一 ⺈ 丿 斤 …日本
B＝十 丿 ㇇ 斤 …中国

戸 A＝一 ⺈ 丿 ……日本・中国
B＝一 丿 ㇇

「所」の扁部について、日本と中国の筆順の違いは、字体上の相違からくるのであろう。即ち、Aをとる日本では、第一画は横画。Bをとる中国の第一画は左払いである。中国では、康熙字典にある字体を採用して、筆順上は「反・后・斤」等の系列に置いたのであろうか。

一方、同じ中国でもこの部分を単独で書く場合の「戸」の字では、第一画は「点」で、筆順は日本と同じAである。「肩・扇・房・扁・炉」などすべて第一画を「点」にし、筆順はA。「所」と同じ例は見当らない。康熙字典では「肩」の第一画は「横画」、「肩・扇・扁・房」では「左払い」になっていた。

(15) 「印」の場合

印 A＝⺈ 一 一 卩 …日本
B＝一 十 十 卩 …中国

C＝⺈ 一 十 卩

これにも字体の相違がからむ。即ち、新中国が採用したBの筆順では五画となる。もっとも、五画に書く例は、伝統的に書写体では普通に行われてきた。但し、その場合の筆順はCであった。Bによる筆順は、古来、なかったと言ってよい。先述(6)の「卵」で触れたように、両字の関連で生まれた字体及び筆順なのかと想像する。

(16) 「喜・善・嘉」の場合

喜 A＝…日本　B＝…中国

善 A＝…日本　B＝…中国

字形の上では日・中とも変わらないが、中国はBとした。Bは、伝統の中で楷書でも行書でも併用してきた筆順である。しかし、Aで書く場合、その結果として「サ」部を片仮名の「サ」のように横画と交差する形にしていた。現在の字形をBの筆順で書いて下につき出ないようにするにはかなりの注意がいる。

ちなみに、康熙字典では「喜・善」は現在の形をとり、「嘉」だけは「サ」状に交差する形にしている。新中国では、三字とも交差しない形に統一し、筆順には、下につき出やすい伝統的書写体の筆順を残したということになる。

(17) 「升」の場合

升 A＝……日本　B＝……中国

「升」の形は、いわゆる教育漢字にはないので、「筆順指導の手びき」では扱っていない。が、当用漢字には「昇・升」共に入っている。そして、筆順は古来楷行草を問わず、ずっとAである。Bの筆順をとると「竹」の草体になってしまう。

とはいえ、指導しないで書かせるとBの筆順が多い。この両字のほかにこの形がないこともあって、片仮名の「サ」や漢字の「弁・算」の下部からの類推が大きく作用するのかと思われる。中国民衆の書写習慣にも、似たような実態があるのかもしれない。

(18) 「車・軍（いずれも簡体字）」の場合

新中国の簡体字には草書にもとづくものがかなりある。「車」はその典型であるが、この形を書くための筆順は草書そのままである。草書を知っている者の眼には別に奇異にうつらないが、簡体字の中で育っていく世代には、特殊感・異和感が大きくなってくるのではあるまいか。下半部の構成は「牛・干・午」に通じる形であり、「横から縦へ」の原則が適用されて当然の形である。

同様のことは、日本でもみられる。例えば「専・博」は戦後の字体整理の際に「寸」の上部を現行の形に整理し、縦画が下につき出ない「由」的な形を採用した。ところが筆順は「由」の系列に切りかえず、旧字体の筆順習慣のままとした。ところが、当初は大きな異和感がなかったのに、年と共に「専・博」の「由」的部分の筆順は混乱してきている。新しい字体・字形の中で育つ世代は当然「由」の同類とみてその筆順で書こうとするからである。

五、おわりに

「常用漢字的筆画筆順」に対して、筆順を中心に、以上のような概観及び彼我の違いの考察を試みた。今、脳裏に去来するものをあえて言えば、わが国で多様性を見せる部首部分の筆順には、中国でもやはり多様性があるらしいこと。そしてそれら多様性の中から一つを選んで基準を立てようとするにあたって、中国では、伝統（先人の知恵）にこだわっていないこと、である。

筆順は、字形及び点画の形・性格と大きな関連を持つ。形は筆順

を求め、筆順は形を生む。

いま、こうして現代の字形や習慣性から筆順の規範を見据えた中国で、それによる識字教育・書法教育が具体的にどう進められていくのか。その中からどんな文字意識や手書き文字成果がくり拡げられていくのか。成果が普及し、過去の文化へのつながりにより一層関心が向けられるようになったとき、伝統的筆順にどんなかかわり方がされていくのか。あれこれと関心の高まりを覚えている。

〈附記〉「常用漢字的筆画筆順」は北京大学に御出講中の森本正一教授に、和訳については光宗由香理さんに、それぞれ御厚意をいただいた。付記して心から感謝申し上げる次第である。

（千葉大学教育学部助教授）